

動詞の意味拡張における方向性

—着点動作主動詞の認知言語学的研究—

中国語学科 夏 海燕 著



言語表現を見ていくと、面白い現象が観察される。我々はお茶も要求も「飲み」、飯もパンチも「食い」、飴も辛酸も「舐める」ことができる。このように、一つの動詞がその意味によって、飲食物と抽象物という異なる種類の目的語を取ること

ができる。認知意味論では、このような多義語の複数の意味間に拡張・派生関係が存在し、そこに認知的要因に基づいた非恣意的な一方向性が指摘されている。本書は認知意味論の手法を用いて、「着点動作主動詞」と本研究が呼ぶ一連の動詞および意味的に関連のある動詞の意味拡張を取り上げ、意味拡張や文法化における方向性及び写像の実現可能性について研究するものである。

日本語、中国語、韓国語をはじめ、一部の動詞は意味評価上中立な基本義が、意味拡張に伴いネガティブな意味合いを帯びるとい興味深い現象が観察される。例えば日本語の「みる」は視覚動詞として使われる時「テレビをみる」「景色をみる」のように特定の価値判断と結び付かず、中立的であるが、意味拡張に伴い、<ある出来事を経験する>という意味で使用される際は、「憂き目・痛い目・ひどい目・辛い目・いい目をみる」や「ばか・泣き・恥をみる」のように、ほとんどの用例が被害性を帯びている。類似する拡張経路を辿る動詞は「みる」の他にも、「(被害を)こうむる」「(罪を)背負う」「(借金を)抱える」「(災いを)招く」

「(反感を)買う」「(支障を)来す」「(パンチを)食らう」などが観察される。「買う」「食う」のような動詞は、他動詞でありながら<動作主が対象に働きかけることによって、動作主の身体または領域が着点となる事物の移動が起り、動作主が動作の影響を受ける>という<動作主向けの使役移動(AGENT-DIRECTED MOTION)>を備え、本書ではこのような動詞を「着点動作主動詞」と呼ぶ。日本語・中国語・韓国語・英語・ロシア語・インドネシア語などの多言語データをもとに議論を展開し、これらの動詞に<自分の領域へのモノの移動>というイメージ・スキーマによって、<不快な経験をする>という意味拡張が起きることを示す。さらに、このような拡張方向を引き起こした認知的メカニズムを、社会心理学、神経心理学などの観点から説明する。

一方、「批判を買う」と「批判される」、「足止めをくう」と「足止めされる」のように、着点動作主動詞が受身文との平行性を示している。中国語をはじめ、言語によっては着点動作主動詞の一部が<不快な経験>へという意味拡張にとどまらず、さらに受身標識または受身を表す接尾辞へと文法化するという現象が観察される。本書において、主に中国語の受身標識に焦点を当て、着点動作主動詞から受身標識へという意味変化の普遍性およびその動機を明らかにする。

本書の研究成果は、語彙の意味変化という記述的な側面、そしてメタファーの写像、概念化における身体性基盤、言語変化の規則性、予測可能性といった理論的な側面に貢献できると考えられる。さらに、辞書、また教科書などの編集、教育現場への応用を切に願っている。